

五山の僧徒

本田 江楠

八

題して五山の僧徒と云ふも、豈に全豹を窺ふの謂ひならんや。只其紀傳の一斑を、秩序もかく、組織もなく、引証的に臚列せんとはすなり。

熟く按ずるに、禪宗と文學との關係は、獨り足利時代に止まらず、上は鎌倉時代より、下は徳川時代に連れり。鎌倉時代は文學の氣勢未だ甚しく、衰へずと思ひしを東鑑四四の庵に、承久の役院宣を北條泰時に下し賜ひし時、泰時五十人の中より漸く藤田三郎といふ人を得て之を讀ましめたる由見わて、實に豫想外の感ありき。翻つて五山の僧徒を見るに、かの榮西が後鳥羽天皇の御代に支那に赴いて、禪宗を傳へ來りし以降、我僧の彼邦に赴き、彼僧の我邦に來るもの並びに多く、例せば入唐者には圓爾、智侃、德儉、圓旨、元光、友梅、圓月、九淵、龍傑、南叟、龍朔、令密、永嵩、惠光、等揚(雪舟)桂庵、海壽、元旨、斗南、妙佐、策彦、絶海、中諦、中正、翺之、周璋、桂悟、周良等を數へ、入朝者には道隆(大覺禪師)、覺圓(大圓禪師)、紹仁(普覺禪師)、正隆(大鑑禪師)一寧(一山禪師)、祖元(佛光禪師)、正念(佛頂禪師)、子雲(大通禪師)、楚俊(焔惠禪師)普寧、梵仙、惠日、永嶼等を指折り得べし。されば居室飲食の制より、文學美術の方面に至るまで、非常の影響を受けたるは理の當に然るべき所、中にも辨圓(圓爾)四條天皇の御代に支那より歸り、道隆後嵯峨天皇の御代に支那より來りて、禪宗大に擴まりしかば、其頃よりして禪宗の文學に功績ありしこと疑なきが如く、辨圓(圓爾)は建仁二年に生れ、弘安三年に寂せし人あり。後嵯峨天皇、菩薩戒を受け、

親ら黄金の翁を持ちて圓に與へ給ふ。帝の手授は古來儔ひ寡し。當時儒教の日に非なるを憤り、諫議菅原爲長頗る抗衝の志あり。一日大相國の前に道話す。「爾曰、承聞菅公從事儒術是不、諫議色莊而曰然爾曰我法之中佛々授手、祖々相傳、不因師、授爲虛設焉、自以故某世尊五十二世、達磨以來二十七葉、強弩之窺矢雖不穿魯縞、猶以糸受稱釋子、以釋例儒恐亦當然、不知公於孔子幾世乎」。諫議口を箝んで其座を退き、人に謂つて曰く、「我欲與爾師角道義、彼以世系爲言也、而我已陷重圍中耳」と元亨釋書七。いかに碩僧の氣焰の高かりしかを了すると同時に、いかに儒家の無氣力ありしかを憐まずんばあらず。かくて當初公卿儒家の禪宗を憎みしことは、康富記文安四年四月二日の條に「是日申刻南禪寺燒亡云々昔文應帝盡叡旨東福普門草創之伽藍五山上之禪院也去明德四年八月廿二日始炎上今度第二度也云々佛法滅亡之體可衰也」と冷笑したるを見ても付度し得んか。大相國は法を問ふ時、親ら聖一和尚の四字を書して辨圓に授け、夫准后も亦法要を聞きて、自ら女弟子と稱せり。寶治の初、圓の鎮西に行くや。國明圓の來るを喜んで、一日の中に十八ヶ寺を建てたりと云ふ。凡そ檀信の響應之に類せり。正和の初、諡して聖一國師と賜ふ。國師の號は蓋しこゝに始れり。又本朝禪師の號もこれと相前後して道隆に大覺禪師と賜はりしに起れり主釋六。後伏見天皇の正安元年彼邦の僧一寧號一寧山來り同二年後宇多上皇の召によりて都へ上る。上皇山に幸して道を問ひ眷遇頗る渥し。文保元年壽七十一にして化す元釋八。此僧佛儒の書以外、稗史小説郷談俚語にも通じければ集七。禪策中故事方言の曉り難きものは、人皆寧に暨りて之を質せり。支那の俗語の學及唐音の學は、榮西の頃より萌じたれど、更に深く討究せしは此時あるべし日本教史畧。猶一步進ん

で梵語を辨じ、四聲を知りたりと覺ゆるは、臥雲日件錄寶徳元年十月二日の條に「予曰比丘之比字非平聲、見于古人頌也、笠華曰、曹開前輩諸凡梵語則四聲不定也」同二十七日の條に「予又問、憚語所謂轉轆々、阿轆々阿字何義曰阿入聲與此方人驚時聲相同云々」其他例証多し。

爾來幾星霜、憚僧は遂に文字禪の稱ある程に世人の信用を博せしかば、勢ひ佛學を勉めずして、爭うて儒書研鑽する傾きを生じ、従つて詩文を能くする者陸續として輩出せり。しかも義堂の如きは、早く其弊害を戒めき。」

尺素往來二詳類木三ウに、近來閩叢林出世之僧者、閑イッソウシヤシヤイ閣ヲ法門之鼻孔手段、偏嗜儒林家之文字言句、將亦稱知識、之簇者、不持戒律、不剃鬚髮執付無量之雜具、引率數多之僧尼、無定其所居、遊行於都鄙云々。

空華日工集に、應安三年四月廿日、曇瑛懇求說老杜詩、余卻之、且云、自今以去誓不復目外道典籍、公其勿乞、瑛又乞講東山外集、余云、外字又是非外邊事乎、瑛笑而退。

同四年四月廿三日、凡今時叢林遂日彫弊何也云々、鍛鍊學者則世俗名利、莫由入於心腑、是今之爲大弊也云々。

同九月廿八日、講圓覺經、小子兩三輩不臨講筵、余痛責而曰、自今誓斷俗書、不然余必聚闔院外典、於中庭而焚之、以供天帝。

永和元年七月八日、蓋是資口身爲沙門、口讀儒典教壞諸佛子之徒、令起邪見云々。

碧山日錄長祿三、十二、八、にも史料として見るべき節あり。

彼等が儒佛の差異に就いての見解は、佛を以て儒の上に置き、或意味に於ては儒書も佛書も同一視せるが如し。

曰工集應安四年六月三日の條に「守享書記來謂、頻被諸少年督、欲講左氏傳如何、余曰不妨、凡孔孟之書、於吾佛學乃人天教之分、齊書也、不必專門、姑爲助道之一耳、經曰法尙可捨、何況非法、如是講則儒書即釋書也。」

永徳二年二月廿九日の條に、「君又問仁義、余因引軸教教編、合說儒佛二教之義曰、在儒仁義禮智信、在釋不殺不盜不姪不安不酒、儒謂之五常、釋謂之五戒、其名異其義同充然則佛教得兼儒教、儒教不得兼佛教。」

浮圖氏の國學に暗かりしは、名僧すら然りき。一寧の門人師鍊、號を虎關といふ。幼にして穎悟人呼んで文珠童子と云へり。其晩年、渡月橋の詩に曰く、

虹勢截流橫兩岸 一條活路透清波

度驢度馬未爲足 玉兔三更推轂過

其文才羨むに堪へたり。後世替して「夫山有富士、僧有鍊公、是吾之所瞻仰也」と云ふも亦故なきにあらじ彼が元亨釋書は實に我國僧史の權輿なるが、其初め著はさんと志ししは、即ちわのが國典に曹かりしを慙ぢてなり。高僧傳記して曰く「壯時逢一山寧會于建長、山因問本朝高僧事績、鍊不記者多、山曰、公之博辨涉異域事章々可悅、而至本邦事頗澁于酬對何哉、鍊慙服其言矣、於是遍考國史竝雜記等、著元亨釋書三十卷」と。尙ほ碧山日錄寛正二年三月廿九日の條をも參看すべし。臥

雲日件録寶徳元年七月四日の「金城呂詒平家者三句云々予問筑波山在何處、呂曰在常陸州、蓋俗傳自天笠飛來故、山中多異草珍木云々」の如きは寧ろ笑ふ可きか。予とは著者即ち千臥雲老人周鳳なり。周鳳は文明五年に寂したる僧にて、善隣國寶記の著者として世に知られたる文學僧なるに係はらず、我邦の地理及史乘には甚晦かりしことを、自からの日件録に告白せり。彼れは吾妻鏡の撰者を問ふたりき(寛正四、五、七)「神皇正統記の著者を知らざりき」(寛正六、十二)「反對に、自國の典故を修めしは縉紳家に其人多かりしを吾人に告げたりき。平家を聴く一條は、獨り日件録のみならず、蔭涼軒日録以下の諸書に屢く見わたり。蓋當時緇衣の間にも流行せしものならん。

倭此際漢唐註疏の學廢れて程朱新註の講起りしことは特筆大書せずはあるべからず。抑々程朱の學の世に行はるゝことは、惶窩より始れるが如く思ふ人多かれど、文教溫故の説によれば、後醍醐天皇の御代、玄惠法師(五山の僧に非ず太平記の著者と云ふも浮説也)ぞ嚆矢なりける。尺素往來に曰く、「傳註及疏並正義者、前後漢晋唐朝博士所釋古來雖用之、近代獨清軒玄惠法師宋朝渡洛之義爲正、聞講席於朝廷以來、程朱二公之新釋可爲肝心也、次紀傳者史記並兩漢書三國史晋書唐書及十七代史等南式菅江之數家被其說乎、是又當世付玄惠之議云々」と。これ朝廷にて程朱の學を聞しめされし始からん然れども又た、康富記(享徳三)によるに、往時高倉天皇の時に、清原頼業禮記の中より中庸を表章し、舊註を取らずして、直ちに本經に據りて解をあしむこと見わけて其朱熹の註と計らずも一致せるは、卓識の士と云ふ外あらず。此等は先づ問題外に屬し、詮する所、程朱の學は、五山の僧徒か本尊とし、禪理より出でたるものかりとして、深く喜びたりしこと明白なり。例の義堂(周信)が日工集(康曆三、九、廿二)の條に

「余以事謁上府、府君出接余云々、君又曰昨日儒學者講孟子書、其義名々不同如何、余曰所見不同也、近世儒書有新舊二義、程朱等新義也、宋朝以來儒學者皆參禪、吾禪宗一分發明心地、故註書與章句迥然別矣、四書盡於朱晦菴」全廿五日の條に「又見問儒學新舊二學不同如何、曰漢以來及唐儒者皆拘章句者也、宋儒乃理性達、故釋義太高、其故何則皆以參吾禪也。」こゝに新舊二義と云は、即ち朱子學と古學とを意味す。猶此種の例は、諸記録到る處に見ゆれば、さまざまとて略しぬ。

僧徒はかく程朱性理の學を唱へたと共に、韓柳の文藻をば殊に愛したりき。例へば、蔭涼軒日録文明十七年五月廿日に「午後與子雲來曰云々又曰德潛首座字祖溪近日講柳文、蓋華嚴院適慶堂發議我亦可赴講筵、柳文第廿四五暫借爲幸、余諾借之一冊、自廿四至廿九云々」臥雲日件錄寶德三年四月十六日に「天英西堂來、話次及稅禮以韓文墓誌配史記漢書之諸傳之事云々」全七月十七日に「天英西堂來、話次曰、韓文原鬼有已也二字、雙桂曰、也已二字、乃而已二字義、每々有之、然以已也爲而已之義未見所出云々」あゞ其例証擧ぐるに違あらず。杜子美等の詩に就いて憧憬せしことは他日稿を改めて云ふ所あるべし。

かくて僧徒は儒書を見ること度に過ぎて、終には佛説を以て儒書に交へ説くもの多きに至り、時の上皇花園院の宸襟を痛め奉りしを園太曆康永三、九、廿一に見わていとも畏こし。されど世の潮流には容易に逆ふべくもあらず。天皇も僧を以て侍讀とし給ひ、將軍も僧の教を仰ぎ、一般人民も亦多く僧を以て我師と頼み、上下姜りに僧の言を信じければ、朝儀の稱呼も往々誤謬を來せりと覺く、名目秒恒例諸公事篇の初に、元日ゲンニチ、エム宴イム今世諸人以僧爲師イカサシ愛僧イカサシ乞巧奠キカクセン今世ノ僧云キツカとしるせり。足利氏滿の

如きは、治世の要を屢々義堂に問へること、義堂自らの著なる日工集に左の如く散見せり。

十四

應安六十廿四「自今以後宣召栗田口儒人令講孝經政要等、且亦命諸寺長老令講經錄、則庶幾國家安寧尊德日新、府君氏滿領之」

永和元年七月十三日「府君問治國之要、余乃白曰、凡治天下文武二道也、武則治乱而已、文則爲政之術也云々、凡人々爲上者憫下、爲下者敬上、是則非生而知之、以學而知之也、不學而知者未之有也、千萬以學政治之備則幸甚焉」

康曆三、十二、二「君又曰昨日聽孟子既畢、又將聽大學如何、余曰大學乃四書之一云々、敢請殿下四書之學而不怠、別天下不待令而治矣、君曰諾」

全三日「府君問以文武治天下事、余曰修德爲文、正戈爲武云々」

永德二、二、十八「君仍問臣軌帝範是何等書、曰盖君臣治國安家禮儀等事也、往者本朝儒士好讀者也」

豈啻に治世の要のみらんや四書中の疑義或は種々の故事をも就て質せること察するに難からず。當時通く用ゐられたる貞親政要は府君の好んで講せしめし所たり

應安五年二月廿六日「府君遠駕召余、余乃赴、君引入書閣、披貞親政要、而令余講之五紙」

六年二月一日「在報恩寺講無文々集、保壽僧奴來告、府君臨駕、余忙々地赴略謝來意、仍讀貞親政要六紙、及晚歸焉」

凡讀書先須正心而讀之、詩三百思無邪是也、今時學者心術不正、故讀書雖多無所施用」と義堂周信が

抱負潔きかな。南北分立の際は、國家多事にして、教育のこと絶わてあしと云ふも不可なく、田地賣買質入等の證文は悉く假名にて書き(東寺文書の類)、武家にては足利義滿が僅かに學に志ありて、或は菅原秀長等を召して經義を講せしめ(空華集、本朝通鑑廿九)、或は菅原豊長を待つに師道を以てする(空華日工集應召七、永和元、本通五九)に過ぎざりしに、獨り五山の僧徒は深く漢籍に通じて文字禪を以て自ら任じ、駢麗体の文章は巧みに幽玄の論理若くは哲理を發揮し、至美至妙の詩句賦調は山風と稱して正に一世を風靡したりき。而して周信は實に中津(絶海)と共に其魁たりたり。南北混一の後は、使聘毎に明、朝鮮に往來し、其文は皆僧を以て作らしめしこと、周鳳の善隣國寶配に徴して知るべし。使聘既に僧なり。加ふるに使聘に隨つて來往する禪僧も亦尠からず。各詩文を能くして、文學の氣脉は一に禪僧に依て繋がれたり。かの三才圖會などに支那人が日本人を畫くに僧の形を以てし、日本人を擧げて圓頂の徒と見做したる如きも、當時支那に赴きしは、多く僧なり。由るならん。應仁の乱は、極亂中の極亂にして、「汝やしる都も野邊の夕雲雀あがるを見ても落つる涙を」、乱前乱後は儀式等全く畫分せられ、乱後の乱前に及ばざること遙かあるにも係はらず。明朝鮮の交通は依然として行はれ、其使聘は全しく禪僧を用ひたり。當時板刻の業の稍進みしことは、昔時の實錄、立正安國論、吾妻鏡、西山御傳等により推定し得らるゝが(文教温教下)方今偶殘缺せるものを見るに、其多くは佛書あり。日工集、應安三年九月廿二日の條に、「唐人刮字工陳孟千、陳伯壺二人來云々」とありて、其刻手には唐人を雇聘せるものと見ね、反對に當地より彫刻を彼地に託せしこともありなるべし。されば印板も當時に取りては容易の業

に非ず。日工集永徳二年二月の條に「元享釋出乃日本高僧傳也、凡公家武家皈依佛法者、僧俗佛經像卷封罰等諸宗始未皆載于此書、開板之費官賜江州某田地」と記せるを見れば、其費の夥しかりしこと知るべし。されば三條實隆公の如き、親ら司馬遷の史記を寫し、又子弟に課して六經及史記漢書等を謄寫せしめたりと云へり臥雲日件錄 實徳元、九五山の僧徒も頻りに刊書の擧を欲せしむるを得る所少く、唯明國より往々珍本を輸入せりとぞ。後花園天皇の末、足利義政書を明國に致して、百川學海、北堂鈔、石湖集誠齋集等の十二部を求めたること、善隣國室記及び洞雲日件錄(寛正五十四)に見ゆるも、しかもこれ禪僧と共に詩を賦する爲の具とあしたるのみにて、玩具と何ぞ擇はん。當時幕府に限らず、大名に至るまで、禪僧を會して相共に詩歌會を催はすを、無上の快樂、高尚の遊興とすたるなり(日本教育史畧)。僧徒も恐らくは興を詩文に行りて、世乱のうさを忘れたるなるべし。蔭涼軒日錄に、文明十七年六月十五日「予與横川東雲、又歸眞淨院、就慈濟院客殿、又磐礴、出南椽看月舉盃、眞淨、納所、因都寺、持樽來、同侍眞景椿亦來、或小歌或小聯誠一時快也、予亦具丹公重盃者不知其數也、三更後入蚊燭中臥予與東雲並枕談笑至五更、更慰老懷者蔑以加」。知らず蚊燭は紙帳にはあらざりしか。碧山日錄長祿四、四、三、には「鱗次白紙十數枚而作帳以防蚊子」とぞある。あはれ飽くまでも清貧の境涯に安んずることよ。全蔭涼軒の日錄に曰く「文明十八、三、朔、上畧詩後有宴及薄暮皆醉歸、愚謾與一句於途中示小補(横川譚景三)醉踏落華雪、小補應聲曰、吟依修竹風、人々聯數句小補秀峰及愚乘與先衆歸、誠一時快也」と學僧の風流亦掬すべからずやは。

五山の僧徒は斯の如く風流三昧の氣を帶ぶるに反し、縉紳家には却つて眞に學問に一身を捧げし人

あり。藤原兼良の如き其人あり。兼良は朝儀に熟し、和歌に巧みに、神道にも通じ佛書にも涉り、世に無双の宏才と稱せらる。自ら謂ふ「吾嘗亟相に勝れたること三あり」「彼爲左府吾爲相國、彼其家門微賤、吾累世攝家也、彼知漢事者李唐以前而已、知我朝事者延喜以前而已、吾既知倭漢之故典、加之李唐以後之事、延喜以後之事、然吾百歲之後世人尊吾不如彼非無遺恨焉」と。其言誇大の嫌あきばしむらざる。雖も「延喜」の乱世に在りて、江次第公事根源、花鳥餘情、歌林良材、日本神代記纂疏、重編職原枚、樵談治要、東齋隨筆、桃華桑葉集、元享釋書註等を著し、（本朝通鑑六四）「誠に賞嘆するに堪へたり。其他二條良基洞院公定實熙、三條西實隆の如き皆該博にして各撰述する所あり。又た朝儒と稱する者は、菅原、清原の兩家にして、就中清原業忠を以て首とあす。碧山日錄長祿三年四月二十三日の條に曰く、「本朝諸儒用清家中家菅家江家南家式家善家之學、經之與紀傳各異厥業、凡七氏之家有不墜先緒而教授者、又有怠學反術廢其家傳者、又有其家無嗣而纔名存者、而今外史業公積精深思通達其旨、頃日大開講釋議說論語尙書左氏傳及諸典、全辨如翻波、天下學者皆師之、以公出故清家之學大興也」と。頗る賞揚せるにあらずや。蓋足利氏の季世に「既に學運の種子は萌しつゝありあり。徳川文學を生ずべき活力は、業に已に此中に存したりしなり。要するに、朝廷の儒者は我邦の故實は明にして毎に僧徒の質問を受け、五山の禪僧は漢文漢詩に長じて毎に縉紳の作文を批點し、彼我互に利益を交換せしこと事實なり。

碧山日錄長祿四、六、四、問前外史業忠公云々評論故事、相博不少矣、又出其先所記史簡編年政要等書、余欲詳見之而求數日見傳、乃許之。

歐雲日件録には、康正長錄寛正年間を通じて、僧周鳳より縉紳其他に問ひし例甚だ多し。

空華日工集には、流石に義堂の自記として、問ふよりも問はるゝ方の記事多し。康曆三年二月九日「儒士秀長至出釋尊雲井坂兩詩而求改」全八月十四日「翰林菅秀長來説且出和歌序而未改、盖明日内相府賞月之會也、余爲改之」永徳二、正、十、「侍從中納言殿至、出和余門字韻呈二條准后詩八句者、求余改、今數字云々」全廿七日「二條准后以使送聯句求改、且點々六十句改數十字」尙ほ康曆三、十、二、「爲二條攝政殿求、點倭漢聯句」全十二月廿三日「茅玉腕神茗而來、且出看山聯句詩一百韻者而求點兼改」

(未完)

自殺を論ず

黛

南

永劫の過去より、最近の現在に亘り時の經驗的事實は、吾人に證明して曰人生は、矛盾也衝突也、少くとも不合理ありと。吾人は更に是に附加して曰はんとす、是等矛盾衝突を前提として、推論し得たる究竟の斷案は自殺也と。

夫れ宇宙本體の分派作用によりて、發生したる無數の、單一性細胞が、或偶然的事件により、相互的凝結の一團塊を形成し、之に與ふるに生命の脈絡を以てし、施すに智、情、意の粉粧を以てしたるもの則ち人間也。そが神秘的、超越的なる性靈の權威を認識せられ、一切事物の上に、儼然たる君主的特權を執行するに至つて、始めて人間の偉大を肯定し來る。其未だ然らざる間は、彼が價値